

本書は『3月のライオン』(漫画)、『ブラダを着た悪魔』(映画)、『機動戦士ガンダム 水星の魔女』(アニメ)といったポピュラーカルチャーを通じて、「はたらく」こと、労働や仕事について考えるものです。本書のベースになっているのは、労働というと疎外されたものであると考えられ、その疎外の解消を目指し

著作紹介

河野真太郎 著

『はたらく物語』 ——マンガ・アニメ・映画から 「仕事」を考える8章』

(笠間書院、2023年)

がちだけれども、現代ではその疎外の

解消を目指すこと自体が資本の狡知に取り込まれているかもしれない、そのような状況で「労働を自分たちのものにする」方法はあるのか、という疑問です。言い換えれば「やりがい搾取」の「やりがい」がまさに疎外の解消という「落とし穴」となっているのが現代ではないか、そこからの出口はどこにあるのか、ということです。

例えば『3月のライオン』の主人公の桐山零は、中学生でプロとなった天才棋士ですが、プロ棋士となったために進学しなかった高校に改めて入り、高校生活も送っています。これは、常識的に考えれば、「仕事」のために失った(疎外された)人間性を取り戻すためだということになりそうです。ところが、作品のある箇所を読み込むと、どうもそうではありません。高校に行って「普通の青春」を取り戻そうとすることが、仕事(将棋)のためのスキル磨きになっているということが起きています(より詳しくはぜひお読みください)。

また本書で重要になるのは、賃金労働以外の、これまで「労働」としてカウントされてこなかった労働やそのための能力が、現代の資本主義において重要になっているという視点です。『3月のライオン』での「人間性」もそうですし、ケア労働、新たな男性性、起業と人間的成長など、これまで標準的な賃金労働の枠に収まってこなかったような労働がいかに重要になっているかを、さまざまな作品を通じて論じています。最終章ではこれまでにない(これまでの私にはないということです)試みを仕込みました。そこも注目していただきたい点です。

本書を書くにあたっては、以上のような一見硬い話題を、いかに読みやすく書くかということを心がけました。それがうまくいっているかどうかは読者のご判断に任せますが、学部生で十分に理解しながら読んでいただけるように心を砕きましたのでぜひ手に取っていただければと思っています。

